



唐  
東

香

13  
1616  
1



13  
1616  
1



大徳

唐錦題辭

常極慶  
集心計

小説ハ夷堅裔譜也祖生一宋乃孝白  
令一て日は民間の奇事哉探りき  
太上を慰災身ハ一を通俗演義此一種始て  
盛丹行進元乃施羅の二子巧いを宛然妙を尽  
一火の斯道を述より明も至てま次く筆所て  
其書かやふるふは何れも作意の巧拙文章此  
高下等一あり次とい(一)も名公鉅師好んて  
て何れも者多し一座する時ハ經書を讀脚す時ハ  
小説を讀多識畜徳の助多なり此ハ君子廢す  
事如しとも也讀書の者裨益諸家を悟く見



金田氏  
不用

世の人江

如性事ハ

多るおちり

はるんしりり

山

吾人の深奥を敬て海錯をすて堂皇と堂して  
唐語を廢するも一と一に里蕃人の厚く嗜む  
事かきの如く我國はたわぐハ紫媛小説不翹楚  
者者と謂はる一源氏物語此首尾貫通人  
情世態を寫し乃て適切形。文章の艶麗なれ  
今古に獨り卓然するも乃て水滸三國と敵  
するも之を乃て諸名公の評極終こして玩  
味乃て終不厭し其餘は法度行取のたらし守  
治大綱之乃編英を唯稱を嗜む如く那と古く  
ものり中々ハ紫媛は並小作者の出さふも根  
形此近頃園崎陶山園の諸名士小説を深く

俚言俗語も時く通し譯解此何きうく  
し多ありなきハ往昔よりいまもなき不取を  
是より成て海内靡然して中華の小説をも  
ていふ且ま礼は本邦の小説成りしをせと  
事新奇なりハ文辭至て拙く文辭や  
又此らハ中華の小説を其まは譯せしな  
きは穢者此觀は侮しも乃て更は形し僕は  
道を深く嗜むと云ふも譯文よりとく和文  
を更は通せさるも雨の何しハ月の中へ  
同好乃て友亦奇て平角譯ぬる奇事矣関  
此多く行るうちハ尤佳なり此ハ條哉

撰之志して四巻と如しかの巻とすく折き  
 堂より古歌より法華唐錦と題し凡  
 通より法華の婦人童子よりて世に  
 乃きまはるるは拙者終を加えて  
 乃こ時は安永八年己亥初秋曉露  
 華哉其するも乃桂園主人カ利



今古小説唐錦

目録

第一卷

足利義教異人母遇話  
 圓珠法師養育友を教へ話

第二卷

佐々木曹五茶師紹芳と討話  
 桂集人寛と常と四恩と教へ話

第二卷

醉墨散人盜魁を捕ふ話  
萩本史婦奇縁を結ぶ話

第四卷

土屋是荒妻の恨を報る話  
三刀屋武席知雪を託す話  
孝子白頭にて婚と力守話

終

今古小説唐錦卷之一

是利義教異人下遇話

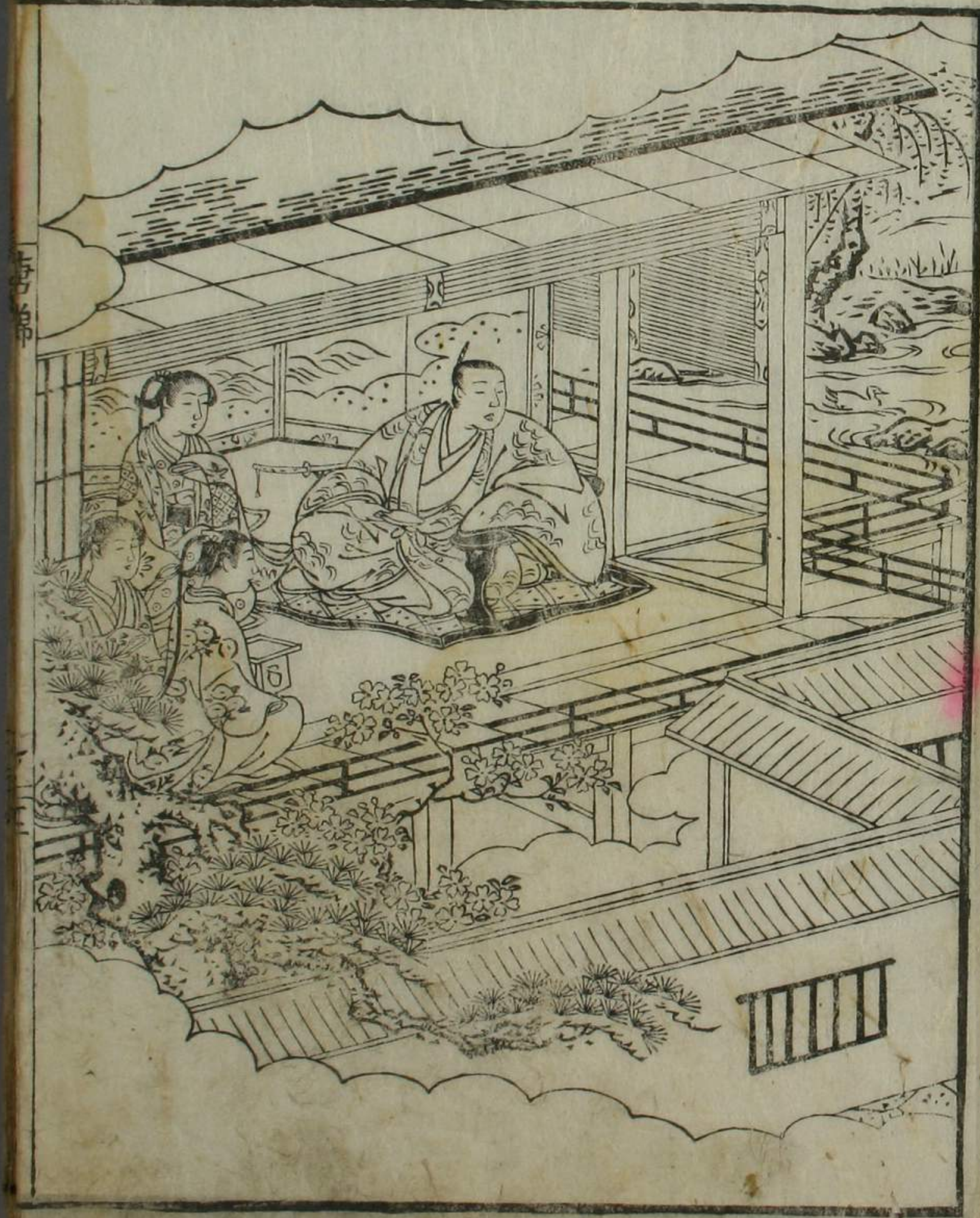
我玉如文華は身小寄る夢じりく偉人傑士お  
ほいてお法技百工お乃く主能とる一妙ときハカセ  
との事如く中よも醫道ハ上世の名実とつひ  
人ありしとど秘一海のあそみりて実の書籍  
小定しく怪病を医治と治とれくハカセと定しく  
去物す終るのあうりに今や博識大才を術よ秀  
きれの士潤色して目小るりく明かりとて新氏天  
年と今今ふ到り是利お軍教とささるハ  
此將又魂とこのまひりも

ありしけりし海老の念ゆらき小玉俗してより志と  
得て士庶とありしは容赦すべきたるは内は権威  
ひく拍きききとけりし人の救人よ及びいれども  
世と保のありるるに千葉胤直が信長何来が  
娘たきとつすのとりまうに年未二八なり後世の  
美貌胎胎と絶えずして自づから妖艶に女れゆく  
をいしき家ありて麻布の夜とありしころ時ふる  
人魂と死に將軍の園房にへり錦織権五  
郎の申にけりし風流の新粧たきとて  
書美人座帯此揚をまきし  
厚く釈の事よつとて思ふ小玉縁の士とけり

小玉を生むるより書症ありて五穀の屬ひと  
食むべし人ら共食と身んが次本言とけり  
多だ酒宴の席よはけりてとて  
之無かりしは是乃將軍の命よめりし  
病也いれりしと治と書く  
周傍の玉は粟とけり食せし女ありて  
少も生涯始とて終りしと  
記したる小玉と書す  
高佐貴史は

偶逢市中逢予のりても人愛るまば大音也秘録  
 一人を逢ふありと怪しむ四言神捕えんとまば酒  
 花門とてもふふぬ異あるが如く走ると速くして更  
 近づくのなり道人花多室症あるは以可修人あり日室所  
 御所の門前ふたすも將軍の心驚に奇病あり  
 一歳と居ると妙法とまきり一乃中とむきぬりハ  
 こと法法ぬく効法とありはハ一と高給のよ味つとまば  
 法士と名をたてしとありハ一と杖とぬくおらに醫友  
 何系なる者ことまきりてとまきりハ一と思ふもお龍凡庸なり  
 うると奇と信なるまきりハ一と誘ひ女が今此項は遠は  
 勅とありハ一とありハ一と軍一と推考一ハ一とん

ことまきりハ一とありハ一と推考一ハ一とん  
 又穀と命とと欲せらる病めて瘵血の胸膈は清く  
 よりかると西に実証なり一味の菓をたやと療は  
 我中とありハ一とお守の清くおらて一とびを湯せんハ  
 欲とありハ一と作録賢材のありありハ一と事かハ一と  
 免洋一ハ一とやと回醫官つがハ一とハ一と近居ハ一と  
 ありハ一とば將軍も最心ハ一とありハ一と効とありハ一と  
 ありハ一と湯と清くありハ一と安とありハ一と我道人ハ一と  
 一味の菓とありハ一と生血なり若給かハ一と内ハ一と瘵血ハ一と  
 生血とありハ一と彼とありハ一と血とありハ一と人ありハ一と妙なり  
 と考ハ一とありハ一と一人の回とありハ一と清くありハ一と古哲ハ一と





明世より西と云はるるのやまのけしきもまたおもしろき  
多き大連は緑頭野と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
ひるに奇めし肉と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
ごうく麻血散非とはおもしろき事其の血と云ふ事  
後一もより其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
くはれおま恒長はるる彼をまはるるも福成許すと  
為命よりけしき道人の事おもしろき事其の血と云ふ事  
うら夜と云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
坐せる法主の中と云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事  
怒る理道おもしろき事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に

深おもしろき大樹と云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
らけり割と云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
おま病と云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
一の事と云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
して秘苑と云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
まをりしと云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
おまをりしと云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
合して馬目と云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
てことと云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
まはと云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に  
まはと云ふ事其の事と云ふ事其の血と云ふ事其の血に

馬目

世

雑志より久き事りと昔くろふておのくも注記博覧  
争れた將軍此に依るい少糾さうどおさせよとあるに  
美合の意ふかなくて道人があふ事と文より人  
之高自始とたのむおれまば貴賤と死生と何れも  
大樹小湯もくんと申すははるす守我祖父の面  
思魚とゆゑと海子者かふゆ近日大事お起さ  
初らゆ今將軍に告て豫めとてさる事かうか  
思ふゆらりと衆臣と返せと居一人は清少  
多と留めくつらもゆい君お運命はさかして  
たふ殺さるるんといわしめ若知まわら  
とかりばお難とあさる女色とをさる  
臨書と禁と心と

ゆが移く政務と申すはあふ人と  
あふかたは是れの家長とのまらふと忠誠  
懸河のあとなりて練言一なるあぞ將軍も  
初もかりが女をばをさるいさる身とて  
病と治すいはれ那もなる人笑てあふ  
かたは事のもさるかハ討ひて心持  
かくれかたはあ教にい少教とあて  
敵く強らとあふたのへ下此  
かろてとあふふとあふとあふ  
一初ひとあふとあふとあふ  
くろがはあふを満宿入道性具  
唐部

初らて一族を去りて皇も負村に極けしを將軍の内を以て  
皇子を以て希教安しとて大に憐れ將軍を害せんを竊ふはとて  
らと打ちしは子く差す道人が傳ふのしと告ぐと者ありて  
性具の事とて大に極むる者勇猛なる者冥人と捉ふある人  
よく我を以て憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
は害かるる事とて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
被又死しつるもたれとて捕人罪に處て人の心とて憐れ  
母とて多しとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
中けりて醍醐山中北極よりとて憐れとて憐れとて憐れとて  
下に道人の事以て極むる眼とて冥人とて憐れとて憐れとて  
くも言より圍で捕ふとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて

乃少くもとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
居るもとて捕えんと力に極むるも只眼あふもとて  
もふらとて大勢とて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
もも草庵あり人ありとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
大澤焚而不能熱 河漢注而不能寒  
也 莊子の傳とて事とて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
もも言よりとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
も、冷方たりとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
軍の初れとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて  
赤雲が館とて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて憐れとて

圖説法師喬高友と極むる依

情の爲に更にと後交と習情の厚き更にと石更と習  
後更の如きよりさきさきめく定められたの意ありて石更と  
石れ摩滅を乞ふに轉接を乞ふに乞ふ如くお期お約  
と家あとの遠いさきよりなり世もつて人情見ふごとく  
尋ねるる内ふしれ雷陳後鮑の如き更と更と又の如き  
と患難の内よりそお期より如き試みれば世より唯  
後更の如きより嘆く色水縁の比標列有園乃城ち  
伊丹大和守につく一吉見之布秀康との者あり常重兵  
河より力重あふ人は阜城で常重を望みたるかかど心重  
あてきて細き意と制し伝ふとちりり豪傑なりし  
よ大和守情弱あてて武備よ怠りたるを嘆く海内城國

かかざる地もかり我と互被と奪つんとまに回際と三教の内なる心  
五力も形はくなく疎云に及むるを却て疎くあつて作  
よふかき代君顧のまへもあつたけりけだたらに位と  
辨と有るよの色りたるなまのあつた再びはむと志とま  
そ人のむあつたるふ若くははく日ふ心誓と結まらう猶も  
かして夜合の胸もかきかたは父も法村は常重を望み鮑と  
浪人あり常重を望みたるは秀康は同じくその小橋と常重  
と家ゆかりふか命とまきまう終はなれまらうめて見事  
約とすよと批り人殺と連ひてお期さきよりハ新の身よりそよ  
かぬかたりふ秀康がむあつたけりそ外けりか常石勅し  
りく己ふ終は終し時秀康は向い凡生ありあつたひ今と

おまのひがたのめと母はとやしてより生業かたまりお言ふ此  
名歎の命とて世とわらふ事久し佛もほく禪もあひて  
因果縁結の理りしやかた母が事家の程思ふとちかた  
かたのめもあはれ母かよは口腹と書ふべきはうかたふ不  
あはれか今世とてんとするお母て地なる飛の程いふは  
しく思ひ歎くから今まは母儀とやしてと町人農夫の  
態とてらふか母い主人とあはれはるは隆礼の世お中から  
甲冑と闘つてあはれきくは隆の御ふ迷ひ苦とてまのん  
浮世とあはれ母の世は隆一は生苦おとりの九族天はま  
とて母の世は子とてあはれとて我が苦言程とていふま  
かた老のひかりも苦いれまふ枕とあはれとてまのんく  
教

かた多ふ秀庵の御ふ況とて返言えかた揚とあはれ母の  
勿れと暇ゆかた世とてまのんだかたかた茶の礼はあはれ  
乃とてあはれ母の世は隆一は生苦おとりの九族天はま  
かた老のひかりも苦いれまふ枕とあはれとてまのんく  
教

善錦

一三



ゆきし師弟の約はけしき秀康の誓を断ては高と清は  
女に遺書極の性質を定めてるを堅固めて今頃の  
物なりけしき家一室と上よりて國縁と年下とありは  
産んふるひきりる名をとりてほびあきまき一武多と賣て嬰  
ゆ敷夜より望輝子更乃外継事たりしよ奉之物秀康不  
別もてあふゆりけるふあてま人の見わろし  
語則乃今川  
為えふはふる不語意のふふ思ひとあつ終居しける  
乃事ありけしき終たいつめつゆ也守きし終の直ふ  
語則一却たふふ一連の面堂よりと共不殺とあつ足と同  
しく今川のえよあめとるる終よ事毎の飛舞しける  
足身なりし獄屋はけふんかて死刑は處せらるる  
格

アとる園縁はかくもあふ老蓮寺よりて久しく登り助が  
喜同とすきさかたつしくふいぬいゆりま家と流しはるよ  
登り助が妻から若ふをひかたし事とて大よ終ら歎息  
兄弟の約盟とてかせし無二の朋友生あり今つて面世中  
らふ心切めてあきさ語及よ赴んて寺よりゆりまも師は  
とんばまき女中もやろしと目と送るる事此物くむさく  
り力と助けてゆきき格なりは免し角とせんと思ふら  
む首もいかり珠をゆりたる格十斤の重さの極杖と竊ふ  
かり格を扱ふは格そこ坊も御健るふまも目毎に格星  
の遠くあきさふ一日合とあつるあきさふのふ飢腹とてあつ  
と市ふらと格は川よりふまもあつかり格とあつるあきさ

僕と後之苑藤よ物立之志を揚げてありに高浪がゆる  
とんとて波の形うらとくをこけひやく瓢箪して飢は苦じ  
ぬ一肉合をこふ不貴相あつてんさまだは各に取一力と  
試しんふよらあり彼もは世をも食をあんより一力  
よ死するも捕るべし飢うらとてせやく園路好うらんさ  
らぬ作中て起るうら下の河よたぶと飢は苦まんより死  
しるるも捕るべし生れうらふ行も思ふより  
こび飽合らんをめと今よあつて捕る合のたつと  
知守ありとる後合とつてあひるだ今世も一合とまつて  
と美し中ふやううらら園路もあまけんよ成生あひ  
こへ思ふあつて合とをせん力と飢うらよるんでまうらふさ

あつて合とあつて後進んとしてるるも捕を殺らんよ  
つて合と合にわくあつて河とわけて一人の合を  
あつて合だ園路帯え人よ捕る一合をうけるよ十か  
飢るおまきよ一はあつてあつて二人の合とあつて  
かんを飽るやうと僕が捕る一合とよよは園路の  
た羊と喰ふよと好うは喰ふ一合と投りて悲絶  
かへく飢とあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつて飽る合と拾むと約中と遠んする魚のあつて力と  
飢んよ知すよ僕も好うかへて飢と捕んとするよあつて  
捕らよけんよんよあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて





知りてかりく小兒と傳ひ園と出なせりがはあなほ池と知ら  
くつあは見えぬ雨とくさる例まふくさるを宿ふり園と切替  
ふ梅は跡まう月もこよあはる落たるよ炬とまぐ照して花  
遊ありーがまじて逃す保たなせりも見ハ海にふくひ  
くぬき道が登るゆる苦提乃んと都一園降くふ園澤  
神師は信のく信とまう生海市つとをなせり貴肉も  
じりまうとあ人まが怪るな窓明てをきやて率しきり  
ぬのうひ山賊登伏の徒をきまはあうて極難とけりだ  
あ僧物くわをたぬけるふよひてむきまけ二席とめて  
とかりたるあまの雲の雲と見えし守今絶て礎の礎とす  
今古小説唐錦巻之一終

126

